

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284005

研究課題名(和文) 盛期・後期スコラ哲学の「実践的な知」と現代徳倫理学

研究課題名(英文) "Practical Knowledge" in the Later Scholasticism and the Contemporary Virtue Ethics

研究代表者

川添 信介 (Kawazoe, Shinsuke)

京都大学・その他部局等・理事

研究者番号：90177692

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,000,000円

研究成果の概要(和文)：西洋13世紀以降の盛期・後期スコラ哲学には、キリスト教を基本的な背景としながらも、古代ギリシアのアリストテレスを共通の参照枠とした豊かな倫理思想が展開されていた。本研究はトマス・アクィナス、フォンテーヌのゴドフロワ、ゲントのヘンリクス、ドゥンス・スコトゥス、ビュリダンの倫理学において、認知的機能をも有する「思慮・賢慮(prudentia)」という徳がどのような役割を持っているかを明らかにしようとした。同時に、現代の徳倫理学と中世スコラの倫理思想との関連の一端を解明した。

研究成果の概要(英文)：The Western Medieval Scholasticism left to us fertile ethical thoughts with its common background of christian tradition, while referring constantly Aristotle's philosophy. This research tried to clarify, mainly in Thomas Aquinas, Godgrey of Fontaine, Henry of Ghent, Duns Scotus and Buridan, how important role played the moral virtue called "prudence" which is taken to have cognitive function as well. Concurrently, it elucidated some aspects of historical and theoretical relations between contemporary virtue ethics and the ethical thoughts in medieval scholasticism.

研究分野：西洋中世哲学

キーワード：スコラ哲学 徳倫理学 正義 実践的な知 アリストテレス キリスト教神学

1. 研究開始当初の背景

(1)西洋中世の後期スコラ哲学において、その倫理学思想の重要な特徴の1つに「徳(virtus)」の重視があることは広く認められてきた。それはこの時代のスコラ哲学が古代ギリシアの哲学者アリストテレスの大きな影響を受けており、倫理思想についてもこの哲学者の徳(arete)概念から多くの示唆を得てきたことによる。しかし他方で、西洋のスコラ哲学はキリスト教の教義を前提あるいは背景として営まれてきたことも事実であり、そのキリスト教思想には「十戒」をはじめとして、人のこの世での生き方を方向づける法(律法)を超越者たる神が付与するという観念が含まれている。アリストテレスとキリスト教という2つの要素を含みもちながら成立した西洋の後期スコラ哲学において、この2つの簡単には両立しないと思われる特徴がどのような関係にあるのかは、従来から研究の対象とされていたにもかかわらず、未だ説明すべき点を多く残していた。

(2)一方、現代倫理学においては、カント的な義務論的倫理学と功利主義という結果主義的倫理学の対立を残しながら、今世紀初めから「徳倫理学(Virtue Ethics)」という新しい倫理思想が有力視されてきた状況がある。この新しい倫理思想の台頭の背景にもアリストテレス哲学の再評価があった。人の行為あるいは生き方の評価について、単独の行為や特定の規範・ルールの根拠付けを問題とするよりも、人間の「人柄」とも言える徳を中心に据えるべきだという方向性は、現代倫理学に大きなインパクトを与えると同時に、多くの批判も呼び起こしてきた。

2. 研究の目的

(1)上記の研究状況を背景として、本研究は西洋盛期・後期スコラ哲学と現代徳倫理学とを対比することによって、その両方の特質をより明確にすることを目的とした。スコラ哲学についてはキリスト教思想、現代徳倫理学については近代倫理思想の硬直した状況という異なった背景を持っているにしても、両者にはアリストテレス哲学という共通した参照枠があり、比較のための基盤があると考えられたからである。

(2)ただ、両者の比較研究は広範なものとなるために、本研究では中心的論点を「実践的な知」の解明とした。アリストテレスの徳概念には「知性的な徳(卓越性)」と「道徳的な徳(卓越性)」の区別が認められるが、「思慮・賢慮(prudentia, phronesis)」という徳にはこの両方の徳(卓越性)の特性が認められていると考えられ、これが人間の倫理的行為の「善さ」の何らかの意味での認知を担う心的な能力・傾向性と見なす。この「実践的な知」としての思慮・賢慮を考察の中心とす

ることによって、他のさまざまな徳を考察するための基盤を得ることができるのである。

3. 研究の方法

本研究はその目的からして、基本的には文献の解読作業を研究方法とせざるを得ないものである。より具体的には、

(1)研究代表者と研究分担者(伊藤邦武を除く)は西洋スコラ哲学の研究者であり、それぞれが専門とする哲学者・神学者について、徳に関わるラテン語原典テキストを精密に解読する作業を行い、この作業が研究全般の基礎となった。

(2)上記の研究者は同時に、スコラ学者が共通して基盤としていたアリストテレス倫理思想を、『ニコマコス倫理学』を中心テキストとしながら、そのラテン語訳や諸注解書によって分析し、各スコラ学者への影響関係を吟味する作業を遂行した。

(3)研究分担者の1人伊藤邦武は現代哲学の研究者であり、現代的視座から西洋スコラ哲学の倫理思想について批判を行うとともに、現代徳倫理学の諸文献を解読する作業を遂行した。

(4)以上のような研究代表者と各研究分担者の個別の研究をそれぞれ遂行したが、それと同時に、それらの研究成果を照らし合わせて相互に批判的検討を行うために、本研究独自の研究集会やさまざまな一般的学術研究会において成果を公表した。そしてそれらの成果を研究分担者が学術雑誌において公表した。

4. 研究成果

(1)アリストテレス倫理学とスコラ哲学

13世紀以降の西洋中世スコラ哲学がアリストテレス哲学全般の圧倒的な影響のもとにあったことはよく知られている。本研究主題に関わる倫理学分野に関しても、この影響が顕著であることは、研究分担者それぞれの専門分野であるトマス・アクィナス、ゲントのヘンリクス、フォンテーヌのゴドフロワ、スコトゥス、ビュリダンについての個別的研究によってあらためて明らかとされた。しかし、このアリストテレスの影響は一般的なレベルでは共通して明確であると認定できるにしても、上記の個々のスコラ哲学者・神学者の思想の間では、アリストテレスから影響を受けている側面が相当に異なっていることも明確になってきた。その理由の最たるものは、アリストテレス倫理学そのものが持つ多様性・豊かさにある。すなわち、アリストテレスの倫理学が、現代徳倫理学の論者たちがこの哲学者に強く依拠しながら論を展

開していることに現れているように、人間が持つ心的特性としての徳・卓越性を中心とした倫理学と見なす一方、「実践的三段論法」における大前提が包括的・普遍的な命令・規範であることから、アリストテレス倫理学にカント的な義務論の側面を見て取ることができるからである。西洋中世のスコラ哲学者たちはこのアリストテレス倫理学のもつ多様性のどの側面に着目し重視するかによって、その倫理思想を異にしていると見なすことができることが明らかとなったのである。

(2)徳概念とキリスト教の神学的徳

他方、西洋中世のスコラ哲学者たちの多くは同時にキリスト教の神学者であり、その次代にすでに長い伝統をもっていた神学思想からも多くを学んでいた。このことは彼らの徳・卓越性に関わる思想についても確認することができた。具体的には、人間の有する徳には、アリストテレスに由来する倫理的徳（正義や節制など）とは別に、神との関係によって規定される神学的徳（信仰・希望・愛）が認められている。この神学的徳は現代徳倫理学それ自体に直接関わるわけではないにしても、スコラ哲学における徳概念一般の十全な吟味にとっては不可欠であるとともに、神学的ではない倫理的徳の理解にとっても肝要であることが明らかである。それは、枢要徳といわれる4つの倫理的徳には、正義、節制、剛毅と並んで思慮・賢慮（*prudentia*）が含まれ、これが知性的徳（*virtus intellectualis*）の特徴をも有することが広く認められており、これが何らかの意味で「神を知ること」と結びつく神学的諸徳と深く関連しているからである。ここには、現代徳倫理学には十分に認められていない、人間の超越性を含みこんだ徳というものの重層的なあり方への示唆を読み取ることができる。

(3)徳の結合という問題

西洋スコラ哲学においては、上記のようにギリシア以来の倫理的徳とキリスト教の伝統における神学的徳とが連関しており、それらの諸徳がそれぞれ固有の特性を持つ独自のものであるとともに、それらが相互に結合あるいは連結しているという事態の分析が行われてきたことが明らかになっている。そして、4つの倫理的枢要徳と3つの神学的徳の相互の結合の要の役割を果たすのが、倫理的徳であると同時にあらゆる行為の善さについての認知でもある「思慮・賢慮」という倫理的徳である。個々の人間が生まれながらに所有している卓越性としての徳は、それ自体としては卓越性ではあっても不完全であり、思慮・賢慮によって何らかの意味で完成されることが必要であると共通して考えられてきたのである。しかし、本研究によって、トマス・アクィナス、ヘンリクス、スコトゥ

スらの間には、諸徳の結合の必要性や完全性の程度、完成をもたらす原因などについては、立場の相違が認められることが明らかにされた。

(4)主知主義と主意主義

そして、神のよって人間に注入される神学的徳を別にして、倫理的諸徳の本質、形成過程、完全性などの論点においてスコラ哲学者・神学者たちの間の相違をもたらしているのが、いわゆる主知主義（*intellectualism*）と主意主義（*voluntarism*）のいずれの立場に立つのかという相違である。この区別はギリシア哲学まで遡ることが可能であるが、13世紀の中葉から倫理思想の重要な対立点となったことが明らかとなっている。すなわち、人間の倫理的行為の善さを本質的に決定しているのが、何らかの行為の善さを「認知」する知性の働きであると見なすのか、それとも、何らかの認知を前提とするにしても、認知された善さを実際に遂行する意志の側の傾向性であるのかという、根本的な対立である。

しかし、上記のようなステレオタイプの理解は哲学的には不十分なものであることが本研究によって明らかとなった。たとえば、従来は主意主義的な陣営に属すると見なされてきたヘンリクスとスコトゥスとの間にも、意志の「自由」の重要性をどの程度に見積もるのかに関して、大きな相違がある。また、主知主義的な立場として捉えられてきたトマス・アクィナスの立場にも強く主意主義的と言える側面が含まれていることが明確となったのである。さらに、この対立点によって重要な論者であった13世紀末のフォンテーヌのゴドフロワの立場が、本研究によって我が国では初めて研究されたことは、中世哲学史研究上、重要な意義を有すると見なしうる。

(5)義務と徳

上記の主知主義と主意主義の対立、あるいはその2つの立場の複雑な連関というものは、倫理学上の義務論的立場と徳倫理的立場との対比ともつながっている。この論点については、研究分担者藤本温がトマス・アクィナスにおける徳論と法論の区別と関係という問題として吟味を行った。すなわち人間の行為において「～すべき」という拘束を与えるものが何であるのかについて、自然法の普遍的命令を認知する知性の働きとするのか、意志における獲得された傾向性である徳の効果であるとするのかが分析されたのである。

そしてその分析の際に、現代徳倫理学の最初の主要文献とされるG.E.M. Anscombeの論文「*Modern Moral Philosophy*」（1958）の議論が参照されたが、この点は西洋中世スコラ哲学と現代徳倫理学との接続をよく示すものであった。

(6)研究の継続

以上のように本研究は十分な成果を出したのであるが、設定した研究課題全体についてはさらなる追求が必要であることも明らかとなった。とりわけ、上記(5)で多少吟味されたとはいえ、西洋スコラ哲学と現代徳倫理学との関係についての研究は不十分なものに留まらざるを得なかった。また、人間の行為の善さについての認知的卓越性である賢慮・思慮の役割と、「～すべき」という広義での拘束性つまり義務論的立場とをどのように整合的に理解するかという点も残された課題である。

以上の残された課題については、本研究の研究分担者であった藤本温が研究代表者となった科学研究費基盤研究(B)「西洋中世の「正義論」がもつ哲学的意味と現代的意義に関する基礎研究」において、その研究が継続されていることを付言しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

小川量子、徳と自由 - スコトゥスにおける能動原理としてのハピトゥス理解の形成、中世哲学研究、京大中世哲学研究会、査読有、32号、2013、80 - 91、http://medieval-philosophy.kyoto.jp/veritas/vol32/80-94_ogawa.pdf

松根伸治、十三世紀末の主知主義論争 - フォンテーヌのゴドフロワの立場、アルケー、関西哲学会、査読有、22号、2014、157-167 - 167

松根伸治、トマス・アクィナスと徳の定義、中世哲学研究、京大中世哲学会、査読有、33号、2014、23 - 46、http://medieval-philosophy.kyoto.jp/veritas/vol33/23-46_matsune.pdf

松根伸治、枢要徳はなぜ四つなのか - トマス・アクィナスによる理論化、南山神学、南山大学、査読無、38号、2015、109 - 143

山口雅広、トマス・アクィナスの良心論 - 良心による拘束と思慮によるその補完、龍谷哲学論集、龍谷大学、査読有、29号、2015、65 - 90

小川量子、意図の善と行為の善 - トマスとスコトゥスにおける倫理的行為の対象と目的、慶應義塾大学言語文化研究所紀

要、慶応大学言語文化研究所、査読無、46号、2015、111 - 124

藤本 温、徳と義務 - アクィナスによる、中世哲学研究、京大中世哲学研究会、査読有、34号、2015、1 - 21、http://medieval-philosophy.kyoto.jp/veritas/vol34/1-20_fujimoto.pdf

伊藤邦武、フィクションの世界とは何か、龍谷哲学論集、龍谷大学、査読無、29号、2015、17 - 44

松根伸治、枢要徳はなぜ四つなのか - トマス・アクィナスによる理論化、南山神学、南山大学、査読無、38号、2015、109 - 143

辻内宣博、アクィナスにおける人間の知性的魂の見方 - 「境界」としての人間の知性的魂、白山哲学、東洋大学、査読無、50号、2015、39 - 67

小川量子、主意主義的倫理学における徳の結合、中世思想研究、中世哲学会、査読有、57号、2015、1 - 19、http://jsmp.jpn.org/jsmp_wp/wp-content/uploads/smt/vol57/001-019_ogawa.pdf

〔学会発表〕(計 10 件)

松根伸治、十三世紀末の主知主義論争、関西哲学会、2013年10月20日、大阪大学(大阪府豊中市)

小川量子、意志と情念、京大中世哲学研究会、2013年12月21日、京都大学(京都府京都市)

藤本 温、徳と義務 - アクィナスによる、京大中世哲学研究会、2014年7月26日、京都大学(京都府京都市)

小川量子、スコトゥスの主意主義的倫理学と徳の結合、中世哲学会、2014年11月10日、中央大学(東京都八王子市)

辻内宣博、「倫理学」という学問の基本的枠組み - ビュリダンの『ニコマコス倫理学問題集』第1巻、京大中世哲学研究会、2014年4月26日、京都大学(京都府京都市)

辻内宣博、「幸福」が成立する場所 - アクィナスとビュリダンの幸福論、関西哲学会、2014年10月25日、関西学院大学

(兵庫県西宮市)

松根伸治、トマスの徳倫理における思慮の位置づけ、京大中世哲学研究会、2014年6月28日、京都大学(京都府京都市)

山口雅広、トマス・アキナスにおける良心と思慮、関西哲学会、2014年10月25日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

松根伸治、ガンのヘンリクスとpropositio magistralis - 13世紀末の意志論の一局面、中世哲学会、2015年10月31日、名古屋工業大学(愛知県名古屋市)

山口雅広、トマス・アキナスの良心論 - 良心による拘束と思慮によるその補完、京大中世哲学研究会、2015年4月25日、京都大学(京都府京都市)

〔図書〕(計 1件)

古牧徳生、浦英雄、次田憲和、佐藤真基子、山口雅広、晃洋書房、神と生命倫理、2016、144 - 165

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川添 信介(KAWAZOE, Shinsuke)
京都大学・大学院文学研究科・理事
研究者番号：90177692

(2) 研究分担者

藤本 温(FUJIMOTO, Tsumoru)
名古屋工業大学・大学院工学(系)研究科・教授
研究者番号：80332097

松根 伸治(MATSUNE Shinji)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：90432781

辻内 宣博(TSUJIUCHI Nobuhiro)
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：50645893

小川 量子(OGAWA Ryoko)
立正大学・付置研究所・研究員
研究者番号：60648442

伊藤 邦武(ITO Kunitake)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：90144302

山口 雅広(YAMAGUCHI Masahiro)
龍谷大学・文学部・講師
研究者番号：20646377